

歯科医療の評価を全身に求める ニューノーマル

口腔完結型の歯科医療から 生活習慣病を予防する歯科医院への転換

～口腔疾患と生活習慣病の関連性について、患者様に伝えられていますか？～

1 歯科医療で改善できる全体的評価指標を活用

口腔の身体への影響は、情動・機能・臓器横断的に多義に及んでおり、まさに“お口”は身体と人生へのインフルエンサーといえます。近年、健康寿命延伸が重要課題となり、歯科医療の目標も口腔完結型から全身の健康維持増進へとシフトしていくに伴い、その健康増進効果を可視化して示す必要性が生じています。歯科疾患は、28種類の生活習慣病と関連があり、歯科疾患が非感染性疾患(NCDs: Non-communicable diseases)の発症要因であり、その制御が生活習慣病の発症・重症化予防にもなります。まさに歯科疾患は、NCDsの上流イベントなのです。“歯科治療のエンドポイントを口腔の外に求める”そんな歯科医療の組み立てが当たり前になるでしょう。

「歯を残す歯周治療」から「全身疾患の発症予防」へSPTの目標を拡大

歯周病と糖尿病の医療連携も近年定着してきました。昨今は口腔細菌と重篤な疾病形成との関係が注目されています。さらに胃がんでお馴染みのHelicobacter Pyloriが新たに歯周病菌の分類となり、センセーショナルな論文が次々と発表され、口腔病原細菌の除菌技術がますます必要とされる状況になっています。それゆえ歯周治療の主な目的は、歯を残すことから、症状のない軽度歯周炎でも生じる慢性持続性炎症と歯原性菌血症の制御（全身疾患の発症予防）に変わりつつあります。現行のSPT（supportive periodontal therapy: 歯周病安定期治療）がまさにこの目的に合致した制度で、本講演ではこの予防ケアの受療者を増やすための勘どころについても提示いたします。

2 歯科医院が街の生活習慣病予防の ハブ機能を担う日

2022年には、歯科疾患と生活習慣病（NCDs）の関連について、科学的根拠（エビデンス）の質が最も高いアンブレラレビュー(20)が発表されました。

歯科疾患は生活習慣病の上流イベントであると位置づけた上で、歯科診療に保健指導を組み込み、全身的な評価指標の改善を図ることも今後は求められてくるでしょう。

生活習慣病のゲートキーパーとして、歯科のあり方が問われる時が来ています。

これが、人生100年時代の新しい歯科医療の目標と大義になり得ると考えられます。

最新の補綴治療のゴールは ”噛めること”ではなく”生活習慣病の予防”

成功のカギは「歯科職種と管理栄養士の連携」にあった！

大白歯が喪失し咀嚼機能が低下すると、軟性食材である糖質の摂取頻度が増加する傾向が見られます。これらは嚥下しやすく食速度を増加させ、過食や食後高血糖を招きます。こうした糖質偏重食は、2型糖尿病など非感染性疾患※の発症要因となります。

さらに、咀嚼力が要求される肉類、野菜類の摂取が不足し、タンパク質・ビタミン・ミネラル低栄養に陥りやすくなります。そのため、血中アルブミン値が慢性的に低い状態(3.4G/DL以下)となり、やがて骨格筋減少症(サルコペニア)やフレイルにも関係します。

自然歯の数と成人のメタボリック症候群の評価項目との逆相関を明らかにした報告もあり、また75歳以上の成人272名の調査で、歯の喪失や咀嚼トラブルとサルコペニアとの有意な関連も報告されています。

これらのことから、歯科補綴による咀嚼機能回復の数値化と連動して、管理栄養士が糖質偏重食とタンパク質低栄養の改善(保健指導)を行うことで、糖質代謝や骨格筋量が改善すれば、歯科補綴が代謝性疾患、サルコペニアやフレイルの予防・改善になると考えられます。

(※NCDS: NON-COMMUNICABLE DISEASES)



このような背景の中「第7回POPS特別例会では」…

この歯科治療から生活習慣病の発症予防への情報を踏まえ、歯科医師・歯科衛生士が管理栄養士とともにこれからのクリニックにおいてどのような取り組みが必要かを考えます。

特別講師、武内博朗先生によるう蝕・歯周病・欠損治療における生活習慣病との関連についての講和をはじめ、参加特典として明日から使える「最強予防歯科ツール」の特別販売や体組成計の無料測定体験もご準備しております。

本講演が、歯科で行う健康づくりの実践的な活用につながれば幸いです。

この機会をお見逃しなく！！

＜特別講師＞

医療法人社団 武内歯科医院 理事長
日本大学歯学部 臨床教授

武内 博朗先生

お申込みの詳細は別紙「申し込み専用リーフレット」をご覧ください

2025年

1月26日(日)

TB - SQUARE osaka

にて

